

## 特定ケア看護師としての活動 ～複数部署での活動を通して～

横須賀市立うわまち病院 鶴井亮扶

横須賀市立うわまち病院NDC 4期生の鶴井亮扶です。

横須賀市立うわまち病院は三浦半島に位置し、当院にはNDC研修センターで研修を修了した特定ケア看護師が5名、また一部区分を修了している皮膚排泄ケア認定看護師が2名在籍しています。

先輩には2期生の畑貴美子(クリティカルケア認定・特定ケア)看護師が院内で横断的に活動を行っており、RRS(Rapid Response System)の導入やRST(Respiratory Support Team)、多職種カンファレンスの導入、推進など多岐にわたる活躍をしていました。

私自身は手術室でほとんどのキャリアを過ごしており、麻酔科医師不足を常日頃から感じて過ごしていました。そんな中、筑井菜々子NPによる特定行為についての講義を当院にて聴講する機会がありました。自身のキャリアの中で管理に進むか、認定などの方向に進むか考えていた時期だったので、とても興味を引く内容でした。自分でも調べてみると、特定行為を修了することで麻酔の維持を担当できることも知りました。そのため、特定行為研修を修了し、術中の維持麻酔を担当することで麻酔科医師の負担軽減につなげ、空いている時間は手術室看護師として活動することで手術室運営を円滑に行えるようになるのではないかと考えていました。また、手術室看護師にありがちな「手術のことしかできなくなるので手術室から出たい」といった考えを払拭し、後輩看護師の新しいキャリアモデルになれるようにとも考えました。

実際に研修の内容を調べると、内科的な知識や病棟の経験が重要になると分かりました。ただ手術室での経験がほとんどで病棟の経験に乏しいためNDC研修を行う前にICUで研修させてもらえるように畑看護師に配慮していただきました。

その際、当時ICUにいた集中治療医の牧野淳医師より、集中治療のみならず、内科診療の奥深さ、継続した医療の重要性などを教わりました。

そのため卒業後は麻酔科、手術室のみならず、畑看護師のように院内を横断的に活動し、地域で活躍できるように内科的知識を深め、医師と看護師の橋渡しとなる役目も担えるようになってと決意しました。

2020年3月に無事に全区分特定行為研修を修了し、卒後研修では、内科・整形外科・麻酔科を選択しました。途中COVID-19の流行により、COVID-19病棟勤務になり、病棟業務を行いながら、呼吸器の設定変更などを医師と相談して行わせていただきました。そのような研修期間を終えて、現在私は総合診療センターに所属しICUサポートチーム兼麻酔科での活動を主に行っています。月木金が麻酔科、火水がICUといった形で曜日ごとに活動場所を変えています。

当院ICUは今年度、昨年までのsemi Closed ICUからOpen ICUに変更になりましたが、ICUサポートチームが総合診療センター内で立ち上がり昨年度とできるだけ同じ形で患者の診療に当たれるようになっていきます。朝の多職種カン



ICU入室者の処置

ファレンスから始まり、午前中にICU入室患者の回診を医師と共に行っています。回診中はとてもオープンな雰囲気です。質問などあれば医師からのミニレクチャーを受け、By systemでアセスメントを行い全人的に患者の把握を行っています。処置についても医師と分担して、できるだけ医師、看護師の業務負担が軽減できるように関わっています。

一方、麻酔科では麻酔科業務をメインにし、砂川浩麻酔科部長と共に麻酔導入を行い、術中の麻酔維持、退室までの一連の麻酔業務を行っています。また麻酔科医師が充足していて手術室看護師の不足があれば手術室看護師として手術に入り手術室全体が円滑に運営できるように調整を行っています。

そんな中、再度COVID-19の流行があり、COVID-19病棟への支援が必要な状況が起きました。麻酔科の砂川医師へ支援について相談すると「麻酔科で働いてもらえるのも大事だけど、



維持麻酔中

手術室全体、ひいては病院全体に貢献できることが一番だから、足りない部署があればどんどん支援してください」と温かく送り出してくださいました。

その言葉で自分の活動の形は「必要な場所で必要な時に必要なことを行える」特定ケア看護師になることが重要だと再認識しました。

今年度は臨床研修が終わったばかりなので地域支援などに行く機会を得ていませんが、自施設でも、地域に行っても必要な能力を日々身につけられるように今後とも学習を続けていきたいと思います。また、その経験を伝えて、一人でも多くの特定ケア看護師の仲間を増やしていければと考えています。